

C. C. Richardson

Early Christian Fathers,

(Library of Christian Classics, Vol. 1)

London: SCM Press, 1953, pp. 415, \$5.00

J. Baillie, J. T. McNeill, H. P. Van Dusen が編集した Library of Christian Classics の第一巻をこの紹介する。この書は C. C. Richardson が主幹となり、E. R. Fairweather, E. R. Hardy, M. H. Shepherd が協力して出来あがったものである。C. C. Richardson は現在ユニオン神学校で教會史を講じ、The Christianity of Ignatius of Antioch, 1935; The Church through the Century, 1938, 等の著作があり、米國聖公會の人だと聞いている。

この書には初代基督教文獻に関する序論と、第一クレメンツ、イグナチオス書簡、ポリユカルボス書簡、彼の殉教記、デイダケ、第二クレメンツ、デイオグネトスへの書簡、ユスチノスの第一辯證論、アセナゴラスの基督教辯論、及びエイレナイオスの異端反駁論の抜萃について序論、高本、テキスト、文獻、英譯がのせられている。

各書の序論のところでは著者、年代、場所、その思想が簡潔にのべられている。これを表で示せば、

第一クレメンツ、ローマのクレメンツ　ローマ　九六―九七年
イグナチオスの書簡、イグナチオス　スミユルナ　トロアス

新刊紹介

トラヤヌス帝時代の後期

ポリユカルボスの書簡、ポリユカルボス　スミユルナ　イグナチオスがローマに着くまで

ポリユカルボスの殉教記　ピオニウス　四世紀末

デイダケ　編纂者不詳　一五〇年頃　アレキサンドリア

第二クレメンツ　著者不詳　二世紀半迄　アレキサンドリア

デイオグネトスへの書簡、一―十章、エイレナイオスの先驅者　十一―十二章、彼の後繼者　二―三世紀初　小アジア

ユスチノスの第一辯證論、ユスチノス　一五五年　ローマ

アセナゴラスの基督教辯論　アセナゴラス　一七六―一七七年

アテネ

エイレナイオスの異端反駁論　エイレナイオス―ルグントヌ

ム

でこれらは先づ古代教會史家が説くところにもとづいて考察されている。ただポリユカルボスの書簡に於ける P. N. Harrison の假説への反駁、問題の多いデイダケの研究、第二クレメンツ、デイオグネトスの著作場所の決定等については猶納得しかねるものが残された。著者の思想に關して特にユスチノス、アセナゴラス等辯證學者の正統性を高く評價しているが、このことはユスチノスをかの A. Nygren がアガペー・モティーフの著しいものとして特にとり出した事柄から考へても興味ぶかい。(Cf. *Agape and Eros*, E. Tr., II Vol. I, pp. 51 ff.) エイレナイオスの思想についてもかなりくわしい紹介がされているが譯文が抜萃であるこ

とは残念至極である。

譯について一々原文を参照していないから何んとも云へないが、従来よく用いられて来た Ante-Nicene Fathers の譯がいざをかせにもなく讀みにくいのに對してこの方は流暢でわかりやすい。本来この叢書は英語で基督教古典をよまうとする多くの人々への要望にこたえて譯も英語として完全なものにし、各書の順序や内容に創意を加へたものであるからそのつもりで讀むものには至極便利である。しかしそれだけに原文の持つニュアンスが失われてはいまいかというおそれが残される(因みに譯文の中では原語は少しもしるされていない)。その限りに於て本格的に古典をよまうとするものにとつてこれは怠慢の種になるかも知れない。吾々はやはりこの譯が用いたと云ふ Funk, Patres apostolici, 2 vols, von K. Bihlmeyer und F. Diekamp 1923, Blunt, The Apologies of Justin Martyr (Cambridge Pat. Texts) W. W. Harvey のものごとりとくんでゆかねばならないであらう。

猶この書には参考文献 三つの索引があつて研究する者の便宜が圖つてある。しかしそれも敢えていへば Ante Nicene Fathers Vol. 9 のそれにくらべれば規模は小さく、且バルナバス書簡、ホルマスの牧者、ユスチノスの他の著作がこの書にのせられていないことから初代教會研究上の索引としては不十分である。

猶 Journal of Biblical Literature, 1954, March に R. M. Grant がこの書の新刊紹介をしてゐる。

小鹽 力著

高倉徳太郎傳

昭和二十九年六月發行 新教出版社
B 6 版 三三〇頁 定價三五〇圓

「先生にあいまつりしは大いなることであつた」と魂の底から告白する小鹽力が、これは、はげしい衝迫にせまられつつ、一字一句刻むがごとくに書きあげた力作である。

高倉徳太郎は大正から昭和初頭にかけて、混沌たるこの國の精神的風土に、福音的基督教の礎をかたく据えた人、牧師として神學校長として單獨者の魂をひつつかんで神の前に立たしめたる人、主の證人として眞摯剛毅の文字をあてるに最もふさわしき人である。「生地」より「死への疾走」にいたる弟子小鹽の勁く美しい筆致は、讀む者をしてちよくせつ巨人高倉に、そして彼をとおして主イエスに邂逅せしめるに足るのであらう。

かつて、キェルケゴールは福音書の記事は、イエスが十字架に近づくや急傾斜をなしてかたむいていると言つた。この書もまた「遊學」あたりの平板化した表現は惜しまれもするが、高倉の腦が錯迷を呈する頃から死に向つて傾きつくしていくくんだり、文字の峻しく、また躍動しているのを見る。その果には、こんな言葉もあつた。「三日朝、專子と光子は、『涙も疾走する』おもいをも